

稲葉小僧（一幕）

三好十郎

時……現代。夜。

所……山田外科醫院内部

人……

戸部文三

稲葉小六

金貝看護婦

本田婦長

山田院長

絹子

友代

小じんまりとした私立醫院の玄関と待合所。下手、ガラスの押扉、それを入ると叩きの

土間、一段あがると廣い板敷になつて居り、そこに丸卓、椅子、火鉢、壁に寄せて長椅子など。壁に大時計。板敷は廊下になつて正面奥（藥局・診察室・手術室などに通ず）と、手前上手（病室に通ず）に伸びている。藥局には廊下に向つてと、土間に向つて小窓があり、受付をも兼ねる。藥局の戸口の側に電話。天井中央から下がっている唯一つの電燈の圓錐形の光がそれらを照し出している。光の輪の外は、暗くてよく見えず。大時計が重々しい音でユツクリと十二を打つ……

幕開く。

誰も居ない……間。

やがて眞暗な街路から、人影が二つ、ガラス扉へ寄つて来る。

聲 ……ええ、こんばん……ごめんください……ごめんください……ええと、こんばんは……ごめん（言いながら扉を押して聲の主が半身をのぞける。文三。ツンツルテンの洋服を着て、動作も言葉つきも恐ろしくユツクリと齒切れの悪い、しかも小學生のようにきまじめで、ニコリともしない男）……こんばん……ごめんください（キョトリ、キョトリと内部を見まわす）ええと……

別の聲 どうしたんだ？

文三 ……う？ うむ、どうもこの……ええ、ごめんください……。

別の聲 じれつてえなあ！ ニー・カイカイデ・カイカイデ！（聲の主が、文三を押し入れるようにして、土間に入つて来る。小六。背廣に烏打帽に革のゲートル。少しそそつかしい位にキ

ビキビとした男で、年は文三より若く、にがみ走つた色白の面上、額口の横に疵あと。あたりを見まわす）……こんばんは。……（返事なし）

文三 寝ちやつたかなあ。

小六 だつてお前、こんだけの病院でいて、まだ十二時を廻つたばかりだつて言うのに一人残らず寝ちまやあしめえ。

文三 兄きあ、近頃の東京知らねえからだよ。こんで、なんてえ事あねえ、日が暮れて、八九時になりや、どこのうちでも、高いびきだあ。なにしろ——

小六 表口に鍵もかわねえで、じや、寝るのも、はやるのか？

文三 それさ、んだから俺も……だけど、病院だからなあ、こんで、いつなんどき……。

小六 （ノロノロした相手の言葉は聞かず受付の方へ寄つて行き、小窓を指先でコツコツ叩く）  
今晚は。……（返事なし。小窓を開ける）ごめん！

文三 ええと……（小窓から薬局の内を覗く）……誰か居ないかね？

小六 へつ、夜逃げでもしやしないか。……。しかし、下駄あ、こうして有るんだから。（下駄を蹴つたりしてジレジレして、身を乗出して廊下の奥を覗き込む）

文三 （その間に頭を小窓の中に差し込んでいる）もしもし。

小六 ……（振返つて押扉に書いてある文字を見る）此處だな、たしかに？

文三 なにがよ？

小六 此の病院にまちげえはねえな？

文三 そりやお前、その、隣りの家で、外科で山田と言う病院に行つてる……ハッキリそう言つ

たんだから——（同時にガツンと音がして、後頭部を窓枠にぶつつける）おつと！……（差し入れた頭が小窓から取れなくなっている）ほつ！

小六 どうした？

文三 その、なんだ、戻らねえんだ。この——（窓枠に両手をかけて首を引抜くこうとモガモガする）ええと……。

小六 てつ！ なんてまあ——！ （文三の後襟を掴んでグイと引く）

文三 て！ てえつ！

小六 （隙間から覗いて）あごを引くんだ、あごを！ あごだよ！ （又、引く。ゴリゴリと音がして、やつと文三の頭が抜ける）……馬鹿め！

文三 へえる時あ雑作なくへえつたんだ。……鼻がもげるかと思つた。（笑いもしないで、両手でかわるがわる鼻を撫でている）……へえ、おどかすない。

小六 誰でもおどかしてなんぞいやしねえ。相變らず、ノロ！ ……ところで、全體、こいつ、どうなるんだ？

文三 うむ。……どうなるつて、お前……誰も出て來ねえんだから、どうにも、これ……。

小六 俺あ急ぐんだ。

文三 だつて、お前、よそのうちだもん、まさか踏んごんで叩き起すてえわけにも行くめえ。……しようねえ、明日でも又出直して來て——

小六 出直してなんぞ來て居れる位なら、今頃こんな場末をウロウロしてやしねえ。

文三 するてえと、なにかね、やつぱし、じゃ——？

小六　するてえと、じや、なにかね——その雑音挾むの、いいかげんに、かんべんしてくれ。久しぶりで聞くと、足の裏がかゆくなら。

文三　んだからさ、そのう！（相變らず）そいじや、磐城の方へ行くんだね？

小六　勿論だ。實あ先程まで迷つてた。山半の親方も當分こつちに居て、若いものタバネをしてくれと言つてくれるしなあ、どつちにしようと思つていたが、こうしてお絹が見つかったとなりや、ウンもスウも無え、あいつと一緒に磐城へ行つて、スツ堅氣で稼ぐんだ。

文三　そうか。しかし、それにしたつて、なにも、そんなに急がなくなつてお前——

小六　細田の兄き達が上野の宿で、俺らの行くのを待つてるんだ。

文三　それ、上海から一緒の人達だろ？　しかし、なんじやないか、何も、ハッキリ約束したわけじやねえんだろ？　なにも、そう——

小六　そりや、こつちの腹が決つてなかつたから、約束はしねえ。だけど、明日の晝迄待つてるから、それまでに來なかつたら、俺達だけで出發する——そういう事になつてるんだ。

文三　だけんど、炭坑なぞに今頃から行つたつて、この、なんだ、どうせ荒い仕事だろう、働けるかねえ、兄きの前だけんど。

小六　なあに、昔取つたキネヅカだ。十代から五六年、東京で山半の親方んとこの飯を食うまで、稼いだとこだ。言わば古巢だもん、ヘイチャラだい。

文三　兄きや、いいかも知れんけど、俺なんざお前、もともとテキヤ稼業で、身體あ、なまつちやつてら。

小六　なあに、少し馴れりや大丈夫だ。病人でさえ無きや、誰にだつてやれら。

文三 そうかねえ。……んだけんど、この——東京に居るようにしたら、どんなもんかねえ？  
山半でお前、若いもん頭で、顔は利かあ。稲葉の兄さん兄さんで、悪かあねえ。俺らも、そうなりや、その下で、チツたあ面白い渡世もやらして貰えら。

小六 まつぴらだ。こんな風になつちまつたのに、顔役だの何だのと言つてゴロついてる時世ではなかるうじやねえか。第一、東京々々と言つたつて、どこに東京が有るんだ？ モロにお前、ぶつこわれてしまつてるじやないか。へ！ 俺ら、五六日前、初めて山手線で一廻りして見て、びつくらしたのなんのつて、それこそ、影も形も、昔の東京のトの字も建つてねえ！ 話じやサシザ聞いていたが、まさかこれ程たあ思わねえやな。いまだに俺にあ正の事たあ思えねえ。

文三 そりや、まあ、そうだろうなあ。  
小六 よんべなざあ、銀座裏あ通つていて、昔の事思い出して俺ら涙が出たぜ。

文三 そらあ、昔、あの邊で鳴らした兄きにして見りや、なんだ、無理はねえとも、うむ。

小六 なに、町や家の事じやねえよ。そんなもなあ、その内又こしらえりやいいさ。俺の言うなあ、人間だ。東京の人間の、つまり、イキだ。どいつも此奴も、ひだるそうな青い顔して、キョロキョロと下あ向いて、そいでもつて、薄つ暗い所で、コソコソと商賣してやがる。負けて乞食になつちやつたならなつちやつたでいいから、思い切りよくサツパリと諦めて、正々堂々と首い持上げて歩いてよ、なんでもいいから働いたらどうだ。ボロう下げて、こえくみしたつて、お前、なんの耻かしい事があるんだ。へ！ 東京の人間も下落したよ。

文三 だつて兄き、そんな、そんな事言つたつて、兄きあ上海から戻つて来て、こんでまだ五六日にしきやならねえ。東京の人間がどうのこうのと言つたつて、いつ、お前、見てる暇があつた

い？ そらあ、まあ、イキやハリが無くなつたなあ事實だけんど、それもお前、こんだけの目に逢つた後だ……なんだ、つまり深い淵にや波立たずと言つてな、大きにこんで、ジツクリと腹あ据えてるから、シンとしていふと言ふ事もあらあ。第一、この、俺達東京つ子にや、こんな風になつちやつた東京を復興する、この、責任だな、つまり責任が有ろうじやねえか。山半の親方なぞも、つまり、それを言うんだ。んだから——

小六 そら、そうだ。しかし復興は東京に限つた事あねえ。いや、東京にしてからが、物が無くつちや復興出来めえ。すると先ず俺達に直ぐやれるのは石炭だ。俺が磐城に行こうてえのは、それだ。

文三 へへ、なに、そんな事よりも、へへ、お絹さんだろう？

小六 そりやまあ、なんだ、有りようは、そのへんかな、フフ。なんしろ、又東京で遊びにん稼業に舞戻つたりして、この上彼奴に苦勞をかけたかねえ。

文三 來年三月高尾が來るか。とんだ、稻葉の兄きも焼きあ廻つた。

小六 ああ廻つたよ。

文三 俺らあ、詰らねえや。磐城へ行つても、長屋の隅かなんかで、お仲の良いのを指をくわえて眺めていふんだ。

小六 お前は、じや、一緒に行くの、よすか？ いや、まじめな話がよ、先刻からなんだか氣が進まねえようじやねえか。

文三 そんな、そんなお前、殺生な事言ふなよ。行くよ、つれてつてくれよ。ただ話がさ、この、話をしてるまでじやねえか。

小六 ハハ、ま、いいや——（あらためて、その邊を見まわして）ところで、この病院は……こ  
んだけ喋つていても誰も出て来ねえというのは、これ、どういう内だい？

文三 （これもキョトキョト見まわす）ええと——しかし——んだからさ、どうで此處で働いて  
いると言うんなら、急に居なくなりやしねえんだから。

小六 わからねえなあ！ いつときも早く俺あ逢いてえんだテキに。……どんな氣持で俺が戻つ  
て来たか、察してくれ。

文三 だつて、出て来ねえもなあ、渡りの付けようはねえんだから、どうも、これ……。

小六 失禮して、俺あ、あがるよ。（靴をぬいで板の間にあがる）

文三 ンだけど、ことわりもなしに、いいかなあ？

小六 別に悪い事をしようと言うんじやねえんだ。それに病院と言やあ、言わば、まあ、誰が飛  
び込んでもいい所だ。……（正面奥の廊下や手前上手の廊下の方などをすかして見ながら）今晚  
は！ ごめん！ どなたか居ないかね？ ……へつ、どなたも居らつしらねえと来た。（手に持  
つていた帽子を丸卓の上にポイと投げ出して）こうなりや持久戦だ。（長椅子にかけようとして  
ヒョイと見ると、文三が板の間の真中にキョトリと突立つている）お前も、かけたらどうだ？

文三 うむ、その……

小六 今戸焼の狸が酒買いに出て戸惑いをしやあしめえし……（全く、文三が戦闘帽を片手にダ  
ラリとさげて立つた姿は、それにいくらか似ている）

文三 だつて、兄き、俺あどうも、この……

小六……（自分の言葉で何かを思い出して、改めて相手をジロジロ見ていたが）そうだ久しぶりだ、



此處で一つ人寄せのタンカぶつばなして見てくれ。

文三 ……なんだよ？

小六 これからバイを始めようという時あ、お前いつも、そのデンで町の角やなんかで突立つていたよ。ハハ。やつて聞かしてくれ。そしたら、誰か出てうせるかも知れねえ。

文三 ……そんな、お前……今更……商賣よしてから五年……忘れたよ、いいかげん……その、第一、こんな所で、よる夜中だつてえのに……

小六 いいじゃねえか。案内を乞うても誰も出て來ねえから、人寄せをしようというんだ。頼むからやつて見てくれ。

文三 ……だつてお前、おらあ、きまりが悪いや。

小六 だから、聞いているなあ俺一人だ。誰か出て來たら、よしやあいい。

文三 だつて、そんなお前、殺生な——

小六 いやか？ ……そうか、じゃ、頼まねえ。

文三 いやつてえわけじゃねえけんどき——

小六 じゃ、聞かしてくれ。久しぶりに戻つて來たんだ、昔の東京の匂いぐれえ、かがしてくれ。

文三 そうかい……んじやまあ……ええと……（頭を搔いたりして考えていたが、やがて、自分の周囲の板の間のあちこちをマジリマジリと見守る）……弱つたなあ……どうも、その……

（持つている帽子をヒョイと板の間に置き、二三歩さがつて、その帽子をジツと見ていたが、想像上の通行人の足が帽子を踏みそうになるのをハラハラして警告するしぐさ）……あぶないよ！おつと、あぶない！ 喰いつくよ、氣を付けねえと！ とつとつとつと！ （例のノロノロした

態度と言葉で、どこが變つたとも見えないが、いつぺんにその帽子に注意を集中させてしまう)

小六 ……うめえや! (ニヤニヤしている)

文三 ……(通行人が三四人立ち停つたらしい。それらの顔を見まわして)へ、へ、へ、へ  
……帽子に見えるでしょ? ……たしかに、へへ、くたびれた戦闘帽だ。……ところうが、實は  
左に非ず、これが、生きている。ノソリノソリと、ねえお立ち合い、おどろくなかれ四六の墓!  
(調子に乗つて、出しぬけに大聲を張りあげる)

(正面廊下の奥から看護婦の金貝——まだ極く若い、白衣に白帽、兩腕を肱までまくり  
上げ、白マスク——が小走りに出て来て、藥局の扉の把手に手をかける)

文三 今に動き出すよ!

金貝 (その聲でヒョイと其方を見て、立停る) ……?

文三 ね? そうら出て來た。

金貝 (めんくらつている) ……あのう——?

文三 ほら、ほら、ほら、動き出した! (まだやつている。小六は金貝の姿を見て椅子から立  
上つている)

金貝 え? ……なんですか? (小六を見る)

小六 ええ、今晚は。あのう——?

金貝 なにか……? (その眼を、氣になると見えて床の上の帽子に移す)

文三 ……うごき…… (言いかけて、夢からさめたようになり) ……なにさ……動きやしねえ。  
(帽子をヒョイと取つて、頭にのせてケロリとしている)

小六 （代りにてれながら、一二歩前へ出て）へ、へ、その、チョット――

金貝 急患ですか？

小六 キューカン？

金貝 いえ、けがでもなすつたんですの？

小六 いえ、そんな――こちらに來ている者を訪ねて――

金貝 ああ、お見舞いなんです。チョット待つて下さい。今、急ぎますから――そちらで。

（言い捨てて藥局に入る）

小六 いえ見舞いじゃねえんで。チョットその――（藥局の扉が締められたので、しかたなく、

その扉を見ている）

文三 ……どうも、この、おどろいたえ。

小六 しかし、なんだなあ、うめえもんだなあ相變わらず。どこを押しや、そんな藝當が出來るんだ？

文三 なにさ、へへ、いくらおだてたつて、もうやらねえ。

小六 だからさ、チャンと利きめが有つたんだから――（言葉の切れぬ内に、藥局の扉を押開けて、繃帯の包みと二三の藥品瓶を手に抱えた金貝が出來て來て、正面奥の廊下の方へ小走りに行こうとする）おつと！（とそれを押しとどめるようにして）待つておくんない。手間あ取らせません。こちらに、その、絹子つていう者が來てる筈なんですが、チョットそれに――

金貝 絹子？ そうですねえ、絹子さんなんて方、入院なすつて居なかつたようですけど……後で、あの、名簿を調べて――

小六 いえ、その、看護婦なんで……看護婦さんの中に――

金貝 はあ？

小六 看護婦さんじゃなくつても――とにかく、こちらにつとめている人の中に――

金貝 私達三人と、それから炊事に一人居ますけど、絹子なんて人は居ません。

小六 ……本郷という苗字ですけどねえ？

金貝 本郷？ ……さあ、本田さんなら居ますけど……でも、本田さんは静江という名です。

小六 さいですか。……（考えていたが、急に眼を輝かして）それぞれ！ それです！ 静江とも言うんです、言つてた事がある！ そ、その女に、いや、その人にそ言つてくれませんか、小六が逢いに來てるつて――稲葉と言つてもわかります。

金貝 はあ、……でも今チョツト手が離せませんから、しばらく待つていて下さい。イナバさんですわね？

小六 （うなずいて）小六です。そう言つて下さりや、わかりますから。

聲 （正面廊下の奥から）金貝さん！ どうしたの金貝さん！

金貝 はあい！（その方へ小走りに去る）

小六 ……（それを見送つてから）ありがてえ、やつと、とつつかまえたぞ！

文三 ……んだけんど、静江なんて名が有つたかねえ、お絹さんに？

小六 あつたんだ。彼奴が、六丁目裏の鶏料理に出ていた頃だ。そのさ、先刻言つた、堅氣になりてえんで、看護婦の學校なぞに通つてた時分よ。店じや静江と言つていた。

文三 そうかなあ。……だけんど、兄きの前だけど、鶏料理と病院たあ違うんだしなあ、なにも

お前、源氏名あ名乗らなくなつて——

小六 源氏名だつて言やあがる、てつ！（嬉しさにその邊を歩き廻る）ハハ、ありがてえ！  
こんだこそ、俺あシヤンとして、なんだ、彼奴にも、いい目の一つも見せてやる。耻かしい話だが、これまで着物一枚帯一筋、引張らした事がねえ。

文三 ……んだけど、なんせ、とにかく、六年てえ月日がたつていゝんだから——

小六 だからよ、彼奴だつてそれこそお前（悦に入つていゝ）なんしろあんなことで、七年前、銀座邊の盛り場あ火が消えたようになるし、仲小路の小僧とはうるせえ出入りにやなる、どうも世間を狭くしちやつて上海へ飛んで以來、たより一本出さねえ始末だ。今度一緒になつたら、ちつたあ、いたわつてやらねえじや、彼奴があんまり可哀そうだ。

文三 違うんだよ、俺の言つていゝなあ……その……

小六 何が違う？

文三 とにかく、六七年てえ月日だもん。……その……まあ……女だもんなあ。……それがソツクリ元のままで今迄暮してゐるか……

小六 なんだ、そうか。ハハハ、だから、こうして看護婦になつちやつてらあ。ハハ。

文三 うむ……いやさ……そりや、一人でやつて來たとしてもだよ、かんじんのお絹さんの腹ん中が……

小六 わかつたわかつた。ハハハハ、お絹つて奴あ、そんな女じやねえよ。よしんば、六年が十年別れていゝようが……ハハハ、逢いせえすりや、お前……ハハ、そこいらの事あお前にやわからねえ、すまねえけど——（その邊を歩き廻つていたのが、フツと言葉を切つて、正面廊下の奥か

ら急ぎ足に出て来た人に眼をやつて立停る。出て来たのは本田婦長。男のような言語動作の中年の女で、白衣白帽白マスクに、兩腕を肩の邊までまくり上げてゐる。氣の立つた顔付きと眼光)

婦長 (小六の方をジロリと見たまま、藥局の入口のそばの電話口にかかり、受話器をはずして廻轉盤を廻す)

小六 …… (相手の横顔を喰い入るように注視する。文三も椅子を立つて来る) ……あのう？

婦長 …… (右手でマスクをかなぐり取つて二人をジロジロ見る)

小六 …… (チョットびつくりして) ええ……その——？

婦長 待つた！ (マスクを持つた手を一つ振つて) ……ああもしもし。共生會ですね？ ち

らは山田外科です。山田。……先月の末に、そら、學生の人を一人よこして貰つた……そう。

……もしもし……そうそう、山田外科醫院。しつかり聞いて下さい。寝呆けちや困るよ！

小六 「

文三 ト (おどろいて立つている)

婦長 ……アツハハ (男の様に短かく笑つて) もちろん！ 用が無きや、誰が電話なんか掛ける

もんですか。あのねえ、ベ—型の給血者を……ベ—、ベ—型。わかつた？ ア—ベ—のベ—！

そう、それを一人間に合わせて貰える？ ……相手は小兒患者だから、一人で結構。いえ、まだ、

ホンのたつた今、開腹すましたばかりで、いよいよ、するかしらないか、まだきまらないけど、も

しかすると三十分位の内に、急にやる事になるかも知れないから、前以てチョット聞いとこうと

思つてね。いずれ決定したら又電話しますけど、念のため……はい。どうぞ早いとこ！ (電話

の相手が向うで何か調べるらしい。その切れ目を、電話口に掌でふたをして、此方を振向くやい

きなり)あなた方、どなた?

小六 (めんくらつて)あの、チョットその……先程の看護婦さんに申したんですが——  
婦長 どなたですか?

小六 ——こちらの、お絹——その、静江という者に、取次いで下すつて——

細長 ですから!(そこへ電話の相手が再び話し出したらしい)ああもしもし。……え? なん  
ですか? ……もつとハッキリ! 簡單明瞭に!……なあにをグズグズあんた言つてんの? 間  
に合うか合わないか、それをハッキリ言つてくれりやいいのよ! そうですよ、馬鹿だねえ!  
簡單々々! ……都合が悪い! 都合が悪いとは? ……今丁度、間に合う人が居ない?  
……じや駄目ね?

(そのチョット前から正面廊下奥に現われた白い人影がユツクリ此方へ歩いて来る。山  
田院長。まだ若く、落着いた、物言いのブツキラボーな醫師。手術衣姿。両手には、ま  
だゴムの手術手袋をはめたまま)

院長 (立停つて、婦長の電話を聞いていたが)駄目かね?

婦長 はあ、なんですか、直ぐには間に合わないと言うんですの。

院長 どうも、そんな事じや、しようがないなあ。……だが、まあいいだろう。

婦長 そうですか? ……(電話口へ)もしもし、そいじや、ま、……だけど、そんな事じや、  
しようがないわね。 お願いだから、もつとシツカリやつて下さいつて上の人に言つといて下さ  
いよ。ホントに、なんのための——(言いつのろうとするが院長が傍に立っているので、思いと  
どまり)じや、さようなら、失禮。(電話を切る) なんてしたら、母親から、なにすることに

院長　しかし、相當貧血しているしね、立會つていて卒倒するような状態では、無理だろう。

……寝せてあるかね？

婦長　はあ三号室の方に。おさまつたようです、だいぶ。

院長　今、立合つている、あの娘さんののは？

婦長　エー型だそうで、駄目です。

院長　そうか。……なに、いよいよとなつたら、折口のでやる。近所から連れて來てもいいしね。町會の台帳はチャンとしてるね？

婦長　はあ。しかし、それだと、今から準備して置きませんと——

院長　タバコ一本くれ。（婦長はポケットからタバコの箱とマッチを取り出す）……なに、やらないで済むかも知れん。おつと——（婦長の差し出したタバコを、思わず左手を出して取りそうになり、氣が附いて宙で止める。その左手の手術手袋の甲の半分ばかりが、ベツトリと血で濡れているのが、はじめて見える。それを認めて此方の小六がドツキリする。文三も首を差しのべてそれを見ている。……婦長は馴れた手付きでタバコを院長の口にくわえさせてやる。婦長は院長に対する時だけは、ひどくやさしい）

婦長　いえ……進んでいるんで、びつくりしました。切開しなくても、どうも、あんなイレウスを起していたんじや——（マッチをすつてやる）

院長　うん、中毒がひどい。急に始まつたもんじやなくて、だいぶ前から來ているね。とにかくあんな小さい子にトルジオンは珍らしい。……（タバコをユツクリと吸つて）……ああ、うまい。



婦長 一時間半、ぶつつづけですものね。こら、この汗。（ガーゼを出して院長の額の邊を拭いてやる）……どうでしょう、先生？

院長 仕事はうまく行つた。……しかし、なんせ、子供だからね。……（タバコの煙を吐きながら）……最善を尽す。（單純に言つて、元來の方へ引返すべく身を返して、小六と文三を見て）……この方たちは——？

小六 こんばんは……どうも——

婦長 面會の人です。

院長 そう……（廊下奥へ歩き出しながら）イル・リガートル、もう一つ、そいからオブエクト・グラスを二三枚、用意しといて。

婦長 はあ。（院長は落着いた歩調で奥へ去る。婦長、チョットそれを見送つてから、サツサと藥局に消える）（それまで小六と文三は、氣を吞まれてマジリマジリとしていたが、今度は院長も婦長もスツと居なくなつたので、ボンヤリする）

小六 ……おどろいたなあ。

文三 取り込んでるようだなあ……けがにんかねえ？

小六 開腹と言つてたから、腹を切つて手術したらしいな。……しかたがねえ、もう少し待つか。とんだところに飛込んで來たもんだ。

文三 しようべんが出たくなつたがなあ。

小六 ばか野郎。

文三 んだけれど、これ、しようがねえじやねえか。（キョトリと立つて、上手奥の方などを、

すかして見る)

婦長 …… (一二の藥品包みとイルリガートルを持って薬局からサツと出て来る)

小六 (あわてて近寄つて) あの、お忙しい所を甚だ相済みませんが、その——静江……という人に、こうして來てるからと、おつしやつといて下さらねえでしょうか。待つなあ、いつまででも待つていますから。

婦長 (噛みつくように) ですから、何の用ですつて言つてるじやありませんか!

小六 いえ、そりや、逢つた上で——

婦長 ですから、こうして逢つてるじやありませんか! 私が静江です。本田静江。私のほかに静江というのは、この病院には居ませんよ——

小六 へつ? ……。

文三 …… (これも、びつくりして、眼をむいて相手を見ていたが、ニタニタ笑い出す) ……へへ、じよ、じようだん言つちや……いくらなんでも、お前さん……山の芋が鰻になるといふ話もあるが、そんな——

婦長 山の芋?

文三 いえ、その、なんです……私は——

婦長 私に面會があると言うから來て見ると——なんです?

小六 いえ、こりや、何かの——

婦長 用が有るならサツサと言つて下さい!

文三 ……便所、どこでしょうか?

婦長 なにつ？

文三 いえ、その、べん……

婦長 便所は——（と頤で上手への廊下を指して）そちらの右。（言い放つて、舌打ちをしながら正面廊下へ。そこへ廊下奥から和服を着た若い友代が、心配そうな緊張した顔をして小走りに出て来て、婦長に出會う）

友代 あのう——？

婦長 ……？

友代 どうなんでしようか？

文三 （小六を見て）どうも、おつたまげたよ。（小六も毒氣を抜くかれて椅子に腰をおろして、ハンケチで額を拭いている）

婦長 あなた立合つてごらんになつていた通り、手術はすみました。

友代 はい、いえ……どうもいろいろありがとうございました。あの……

文三 とんだ静江だあ。（婦長と友代に眼をやる）

小六 ウム、どうも——

婦長 ……（ジロリと文三の方を振返る。文三ビクツとして、ヒョコヒョコと歩いて上手廊下の方へ消える）

友代 それで、なんでしようか……どうなんでしよう？

婦長 どうとは、なんです？

友代 いえ、あの……助かるでしようかな

婦長 ……手術はうまく行きました。

友代 でも、あんなにグッタリとなつてしまつて……あれつきりで眼がさめないで、おしまひになるような事は——？

（こちらの椅子にかけた小六は、額を拭きながら、時々二人の方へ眼をやつている。はじめボンヤリ見ていたのが、チラチラのぞく友代の姿に次第に氣をとられ、注意を集める）

婦長 ……まだ子供さんですしね、それにズツと前から、いけなかつたようです。……でも、まあ、あのままで置いとけば、どつちせ、駄目だつたんですからね。

友代 なんとかして……お願いでございます……どうぞ、ひとつ——

婦長 あとは、心臓がもつか、どうかできまひます。（奥へ歩き出す）

友代 なんとかして……どうぞ……

（婦長と入れ代つたために、友代の顔と全身が見える。その友代を穴のあくほど見ていた小六が、出しぬけにサツと椅子を立つ）

婦長 とにかく、出来るだけの事は尽して見ます。

友代 よろしく、お願いいたします。どうか——

婦長 いえ、あなたは、いつとき、立合つて下さらなくても結構だから、この間に、お母さんの方を見てあげて下さい。（言い捨てて奥へ消える）

友代 はい。……（婦長の消えた方を心配そうに見送つている。その後姿を見守つている小六が次第にワクワクして来る。……友代は、やがて、振返つて、上手廊下の方へ。椅子のところに入

が立っているのをチラリと眼に入れ、手に持ったハンケチで口のあたりを隠すようにしながら、小腰をかがめて、急ぎ足に横切りかける)

小六 ……お……お絹!

友代 ……(驚いて立寄り、そちらを見る) ……?

小六 俺だ俺だ、小六だよ。久しぶりだったなあ。ハハハハ……なにね、おめえんちをヤツト捜し出したら、誰も居ねえだろう、困つちまつて隣りの家に聞きに行かせたら、隣りの家でも、もう寝ちやつていて、なかなか起きないのを、ようよう叩き起すと、戸も開けてくれねえで、此處に來てると言うんだ。そいでヒョイと思ひ出した、おめえが前ぜんに看護婦の勉強していたことがあつたな、それさ! そんな、まあ、テッキリ看護婦になつていと思ひ込こじまつた。おかげで、さつきから随分マゴマゴしたぜえ。ハハハ、いくら訊ねてもわからねえ筈よ。(一氣に喋りながら友代の方へ寄つて行く)

友代 ……(後しざりしながら) あの……どなた——?

小六 (逢いたい人にやつと逢えた喜びに相手の言うことも耳に入れない) いや、捜したのなんのつて! 向うから帰つて來てから、こつち——ホンのこないだ上海から帰つて來たんだ。なにさ、帰つて來たから此處にこうして居るわけだが——ハツハハハ(と一人で笑つて) とにかく、丁度いいあんべえにノロ文と逢つたんで——そら、おめえも二三度逢つたことがある、テキヤをやつていた、そら、おつそろしくノロノロした、まるで油とつくりみてえな——あれだ。(その當の文三は小便をしおえて、上手廊下の方から戻つて來て、上手にノツソリ立つたまま、比の場の様子を見ている) やつこさんを案内役にして、巢鴨から寺島、第六天から渋谷と、次ぎから次

ぎと問合わせちや、まるで足あすりこぎさ。でもまあ、これでやれやれた。……俺あな、——どうも、何から話したらいいかわからねえが……とにかく、かんべんしてくれ。永えこと放りばなしにして、苦勞かけてすまなかつた。なに、はじめ向うへ渡る時あ、こんな、おめえ、六年も七年も留守にしようなんて、夢にも考えてやしねえ。たかだか半年か一年……その氣だつた。だもんだから、手紙も出さねえ。なに、もう直ぐだ、もう直ぐだ、帰りさえすりや……そのつもりでツイ、もう三月、もう半年と延びちやつて……もつとも、頼つて行つた細田の兄きが、向うで請負をはじめていて、俺もまあそいつを手傳つていたが、仕事が忙しいもんだから、どうしても離さねえ。そこい、三年前から、こんだ帰りたくも帰れなくなる。ついなあ。……だけど、六年が間、俺あ……なんだ……お前の事を思い出さねえ日は無え。フツ！（自嘲）中學生じやあるめえし、胸つくその悪い話だが、晝間あ忘れていると思つていゝやつが、夜になると、つい、おめえ——。そこい戦争はあの始末だ。テンヤワンヤの騒ぎさ、あつちも。すると、東京も大變だろうと思う。どうしてるか？そこいやつとまあ船に乗れる事になつて、細田の兄き達と一緒に帰つて來た。いや、内地の山が見え出したら、みんなもう泣いたよ。俺らにして見りや、ほかあどうでもいい、ただもう東京だ。……そんなわけだ。かんべんしろ。

友代 ……（その間も困りきつて、何か言おうとあせつていゝが、相手があまり氣をこめて一氣に喋りつづけるので、氣を吞まれて口出しをする隙は無し、わけはわからず、少し氣味が悪くなつて來て、モジモジと、しまいに奥を振返つたり、上手廊下を見たり、そこに立つていゝ文三に助けを求めような眼をやつたが）……ちがいます。あもう、そんな——ちがいます。

小六（相手をそうだと思ひ込んでいゝので、自分だけでスツカリ内省的になつてしまつて、床

を見詰めて、思い入ったように語りつづける。いや、そうなんだ。しかし……しかし、これからあ、もうお前に、つまらねえ苦勞はかけやしねえ。……昔あしようなが無かった。つまらねえ、俠客氣取りで、思い出してもムシズが走らあ。……上海へ渡つてから、一人になつて、シミジミ考えて見た。それまでの自分のして來た事よ。……なんてまあ、出來そくないの、薄つぺらな……つまり小僧つこ……つまりが稲葉小僧だ。そいつが身にシミジミとわかつた。うむ。……お前に対してのこれまでのやりかただつてそうだ。お前をシンから想つている氣でいて……いや、シンから惚れているくせに、これまで現に俺がお前にして來た事と言えば、お前に苦勞をかけ、お前をいじめる事ばかりだつた。上海へ立つ時だつて、そうよ。俺が留守の間もチャンとお前の身が立つように、なんとか格好をつけて行かざならねえとこを、ウヌが一人合点で行つちまつた。そりや、當時身體ヤバいし、急いじや居たけど、その氣が有りや、それ位の事あ出來てる。……向うに居る間中、腹ん中でお前にあやまり通しさ。ハハ、……そんなこんな、いろいろ考えてな、量見方あ、だいぶ變つた。

文三 ……兄き。おい、稲葉の兄き！

小六 黙つてろお前は！ そいでさ……そこい、一週間前に戻つて來て、この東京の姿を一目見るなり、こんだこそ、お前、ドカーンと、それこそ脳天から、やられた。それこそシチリコツパイ、これまでの自分一人のケチツクセ量見かたから、夢もまぼろしも消し飛んだ……なんしろ、今後どうしていいか、まるつきり、わけがわからなくなつた。……そいで、お前の事だ。とにかくにも、お前に逢つて、とにかくまあ、安心もさせ、お前の考えも聞いて、何もかもチャンとしてな、そんで、まあ、これからお前と一緒に、なんだ、堅氣に働きてえ……そう思つてよ

文三 兄き！ あのう、この人は——

小六 てめえは引込んでるい！ なあ、お絹——

友代 それは、あの……言つて見ますから……いえ……あの……（小六の述懐の間に、何事かに氣附いて、言葉を挟もうとするが、どう言つてよいかわからぬし、氣味は悪くなつてゐるし、それに一方には氣がせくので、遂に、頭を一つ下げると、小走りに文三の傍をすり抜けて、上手廊下の方へ消える）

小六 お絹！ おい！ お絹！

文三 （追いかけて行こうとする小六を止めて）兄き、なんだか、どうも、變じやないかねえ？ どうも、こいつは——

小六 何が變だ？

文三 なんだか、違うんじやないかなあ。

小六 何が違うんだ？

文三 今の、その——

小六 だから、何がどうしたつてんだ？

文三 んだからさ、人違いじやねえかね？

小六 なあに、何か譯が有るんだ。何かキツト譯があつて——

文三 そうじやねえんだよ。そのう、なんだ！ 今のは、お絹さんじやねえんじやねえかねえ？  
小六 なんだつて？



文三 なんだか變だよ。

小六 な、な、なによ言っているんだ。寢呆けるなあ早えぞ。お絹じやねえか現に。

文三 うむ、そらあ、お絹さんにソツクリだけんど……どうも、この、あんまりソツクリすぎらあ。

小六 チツ！ お前どうにかしやあしねえか 顔だけじやねえ、聲もチャンとお前聞いたろう？  
文三 うん、たしかにお絹さんの聲だけんど……だけんど、なんだぜ、つまり六年だぜ。つまり、あれから六年たっているんだよ。その、赤んぼだつて六年たちや六つにならあ。あん頃、たしかお絹さん廿一か二だ。するてえと、今年、廿六七だあ。……今の女は、せいぜい十九か廿だ。兄きの前だけど、人間、さかさに年を取りやしめえ……實あ俺もはじめお絹さんだとばかり思つていたが……よく似ていれば似てるだけ、こいつ、變だよ。

小六 ……（文三が喋っている間に、その事に氣付き、ギツクリ顔色を變え眼を据えて空を見ていたが）……するてえと——（友代の去つた方を睨んでいる）

文三 たとえにも言わあ、子供の大きくなるなあわかるが、ウヌが年を取るなあ覚えねえ。兄きだつて俺だつて、あの頃からあ、六つずつ年食つてらあ。あんまり似てるんで、俺らまでそう思つてしまつたけど、お絹さんだけが元のままで居るわけがねえもんな。

小六 ウーム。……（唸っていたが、ツイと友代の後を追つて行きかける）

（そこへ正面廊下から金貝看護婦が急いで出て来て、藥局の扉を引開ける。その音で振返つた小六、急いでそつちへ寄つて行く）

小六 チョイ、チョイトお訊ねしますが——（扉の把手を掴んだまま振返つた金貝に）今さつき、

此處を通つて向うへ行つた女の人が居ますが——着物を着た、若い——

金貝 はあ？

小六、あれ、誰なんでしようか？ どういう——？

金貝 今、手術している子供さんのお母さんの、たしか妹さんだとか言つていましたけど……お知り合いじゃないんですか？

小六 へ？ するてえと、その、お母さんというのは？

金貝 ああ、それは先刻、手術に立ち合つている最中に腦貧血を起して、三号室に寝せてあります。（言い残して薬局に消える）

文三 ……そうだあ！（手を打つて大聲を出す）

小六 ……？

文三 お絹さんの妹じやねえか、今のは？ たしかあの頃、十四五になる妹が居たじやねえか。そらよ、一度兄きが巢鴨のお絹さんちへ俺を連れてつてくれた事があらあ。あん時に、たしか

小六 そうか……しかし、するてえと……その腦貧血を起して寝ているというのが、じや、お絹か？

文三 そうだよ、たしかにそうだよ。

小六 するてえと、しかし、手術をしている子供の母親がお絹という事になるぜ？ そ、そんな

筈はねえ、お絹に子供が有るなんて、そんな——

文三 そりやお前……んだから……

小六 子供なんてえもなあ、一人で出来るか？

文三 そりやお前、子供なんてもなあ、一人——出来ねえな。

小六 見ろ、子供が有りや、亭主が有るといふ事になるんだ。

文三 先ず、そういう事になる。

小六 なによつ！（いきなり、文三の頭をこづく）

文三 だつてお前……だつて……んだからさ、六年相経ち申し——

小六 まだ言うか！（そこへ金貝が薬品の箱を抱えて薬局から出て来て、廊下奥へ行きかける。

小六、それに向つてすがり附くように）それで、その、貧血で寝ているという女の人は、本郷と  
いうんでしうか？

金貝 さあ、よく憶えていませんけど……本郷なんて苗字ではありませんでしたよ。たしか、み  
なんとか……そうそう、御厨さんと言つていました。

小六 御厨……？

金貝 急ぎますから——（すりぬけて廊下奥へ去る）

小六 見ろ、まるつきり違わあ。

文三 うむ……ええと……だけんど、子供が有つて亭主が出来てるとすりや、こんで、苗字など  
も變つて——

小六 じゃ念のために、當の本人に逢つて來ようじゃねえか。三号室だと言つていた——（はや、  
上手廊下の方へ歩き出している）

文三 だつて兄き、そんなお前、寝てると言うんだから、そこい——（止めにかかる）

小六 なあに、逢つて見りや、いつぺんにわかる——（言いながら、廊下の方へ消えようとしたのが、奥から出て来る人に氣附いてフツと立寄り、その方を見る。やがて妙な顔になつて、後ろへさがる。……廊下奥から、友代に助けられながら、ヨロヨロして絹子が出て来る。小六と文三が友代を絹子と見まちがえた位だから、友代ソックリの女が出て来るかと思つていると、そうではなく、昔は知らず現在は、面差しはどこやらが僅かに友代に似ていと言える程度で、心勞と病弱のためにやつれ果てている。友代の肩につかまつた手がブルブルと顫えている）

友代 大丈夫、姉さん？

小六 ……（さすがに一目で絹子を認めるが、そのあまりの變りようにトムネを突かれて、聲をかけるのも忘れていゝる）

友代 大丈夫？ 歩ける？

絹子 いいの……（小六を認めるや、口の中でア！ と言つて立停る）

（永い間。大時計の秒刻の音。見守り合つてゐる小六と絹子。先程友代をつかまえて一氣に喋り立てた小六の調子では、常の絹子に逢つたらどんなに雄辯にまくし立てることかと想われたのが、反対に、なにも言えないで、ただシミジミと變り果てた女の様子を見つめてゐるだけ。……文三も友代も、二人の様子を交る交る見守つて立つてゐる）

小六 ……（口の中で）……お絹。

絹子 ……（次第にうつ向く）

文三 ……（だけんど、この、變つたねえ、お絹さん。（棒のように突立つたまま、眼がしらに流れ出して來た涙を指の先きで拭く）……だいぶ、なんだ、苦勞したようだなあ。）

小六 ……（文三に言われるまでもなく、相手の様子から始んど一切のことが一度にわかるだけに、却つていたわりの言葉も言えず、涙一つ出て來ない。次第に頭が垂れて來る）

絹子 ……（眼まいがするらしく、フラフラと倒れそうになる）

友代 姉さん！（椅子の方へ連れて行く）姉さん！

絹子 ……いいのよ。（椅子にかける）

（間……）

文三 ……稻葉の兄きが、どうしても、お前さんを捜したいからと言うんでね、俺も、その

……俺あ、その、なんだ、文三ですよ。ノロ文だあ、當時……ハハ、二三度お目にかかつた事があらあ、ハツハハハ（笑うがチツトもおかしそうではない、小六も絹子もそんな聲は耳に人らぬらしい。友代は姉の様子を心配そうに見たり小六の方へ眼をやつたりしている）

小六 ……（やつと頭を上げ、口の中が乾いてしまったような、かすれた聲で）……弱つていようだ。……それに、こんな所だし、なんにも言わない。……俺が悪いんだ。言いてえ事は、いくらでも有るが……言わない。……とにかく、大事にしてくれ。

絹子 ……（聲を立てないで、せぐり上げている）

文三 全くなあ……どうも……（頬に涙を指の先でのたくつている）

小六 ……しかし、たつた一つ、聞かしてくれ。……その、今、手術を受けている子供と言うのは……お前のホントの子か？

絹子 ……（ガツクリとうなずく）

小六 ……そうか。……そいで……そいで、その子の——？

絹子 …… (下を向いて身動きもしない)

小六 え？ ……誰だい？ ……その子の父親は——？

絹子 ……………。

友代 …… (姉が黙っているので、代つて答える) あの……姉さんは、辰造兄さん……御厨辰

造という人んと共に、片附いたんです。それで、辰夫ちゃんと言うのは、その子供です。

小六 御厨……そうか……そうだったのか。

絹子 あれからズツと——私、待ちました。待つていましたけど、あなたから手紙も来ない

……そこい、お父つあん亡くなりました。家は見なくちやなりません……いろいろ、やつて見ましたけど、女手じや、どうにもなりません。そりや、ずいぶん、なににして……とうとう、それで、是非にと言われて、なにする事になりました。……かんべんして下さい。

小六 ……そんな、そりや、かんべんするもしないも……そんなお前——。そうか。

絹子 それについちや、その時、あなたに何とかして話だけでもと思つて、以前のお仲間の人達を、はじからたずねて歩いたんですけど……どうしたんですか、一人も逢えなくつて——

小六 そりやあの頃、大方みんな、東京を賣つて、よそへ行つちやつたから。……そうか。

…… (話している間に急に眼を光らせる) いいや、そりや、いい。しかし、此處で先刻から聞いてると、その子供、だいぶ、むずかしそうじやねえか。こんな際に、その父親——御厨か——その人あ、やつて来もしないで、何をしているんだ？

絹子 ええ、そりや……。

小六 お前にだけ、こうして苦勞させて、……そんなこつて有るもんじやねえ。全體、そんなお

友代 ああの、辰造兄さんは、南方からまだ復員して来ないもんですから……。

小六 え、復員？ ……するてえと、その人、兵隊だったのか？

友代 ええ。

小六 ……。

（そこへ、正面廊下の奥から婦長が出て来る。小走りに上手廊下の方へ横切ろうとして立停る）

婦長 ああ此處に居たんですか。（と絹子と友代に言い、次ぎに小六と文三にチラリと眼をやつて）……こちらのお見舞いだつたんですね？

文三 ……へえ、どうも先程は。

婦長 （絹子に）直ぐ、手術室の方へ来て下さい。

絹子 （ハツとして立ちあがる）では、あの、辰夫が――？

婦長 （自分は薬局の方へ）

友代 （姉を助けて歩き出しながら）しつかりしてよ、姉さん！（婦長の背に）そいじや、もう、いけないんでしょうか？

婦長 急いで下さい。（薬局の中へ浴える）

（友代は絹子を助けて、急いで正面廊下の奥へ去る。あとには、椅子にかけて自分の考えの中に落込んでいる小六と、キョトリと突立つている文三）

文三 だいぶ、この、むつかしそうだなあ。

小六 …… (忘れた頃になつてから……え? なんだ?)

文三 子供さ、その。……どうも、様子が……なんじやないか。

小六 …… (ビクツとして椅子を立つ……そうか。…… (そこへ婦長が大きな帳簿を持つて薬局から出て来る。それに向つていきなり) その、病人は……駄目ですか?)

婦長 …… (ジロリと見るが、直ぐに帳簿を開いて調べにかかる)

文三 …… なんとか、その、ならねえもんですかね?

婦長 …… (相手にせず、捜している頁が見つかったらしく、廊下奥へ)

(そこへ院長がスタスタ出て来る)

婦長 …… (院長に) そいじや、あの――?

院長 うん、いや、……で、近所から来て貰う人の見當は附いたかね?

婦長 はあ……でも、こんな遅そごさんすし、とにかく、いやがりますから……やつぱり折口さんにしましうか?

院長 そうさ、だけど看護婦の手が一時だけでも一人欠けるのは困るんだが……まあ、しかし、ほかに居なければ仕方がないが……とにかく、じや、やつて見るか。じやね、枸縁酸はよして、タオルであつたためて行こう。準備してくれ。

婦長 はい。

院長 そいから、あのお母さんは、此方へ連れて來といてくれ。あすここに置いとくと又倒れる。

第一、ああ弱られちや、見てる此方が、たまらん。クランケ見てるぶんにや、どんなひどい奴でも平氣だが、はたで騒がれるのは、やりきれん。ハハ。



婦長 ……そうします。

文三 (院長に) どうか、ひとつ、よろしく、その……。

院長 やあ。…… (婦長を見る)

婦長 今、なにしているの、見舞いに——。

院長 そう。…… (軽く頭を下げてから急ぎ足に廊下へ。婦長もそれを迫つて小走りに去る)

(取残された小六と文三は、暫くボンヤリしている。……間。……やがて小六はノロノ

ロと板の間を歩いて、あがり端へ行き、そこに立停つて、奥の氣配に耳を澄ますようにしてチョット立つているが、溜息を一つついて、しやがんで靴を取る)

文三 ……どうすんだよ、兄き?

小六 う? ……ける。

文三 けるつて、お前……このままで、お絹さんが……せいから、その、子供が、いよいよいけねえとなりや、お前——

小六 ……俺達あ、居ねえ方がいい。

文三 だけんどお前……そんな……第一、兄きや、そいで、どうすんだい?

小六 そうさなあ……山半の親方んとこへでも行くか。なに、こうなりや、思い残りあねえ。

文三 するてえと、磐城は、やめにするのか?

小六 うむ……なんしろ、張合いが抜くけちやつた。まあ、いつとき山半で草鞋をぬがして貰つて、万事はそれからかな。

文三 するてえと、細田つてえ人の方は——?

小六 なに、先きに行つて貰うさ。……考えて見りや、どうで、俺なんざ、ゴロンボウに生れついでいるかも知れねえんだ。

文三 だつて、そいじや、あんまり、アツケねえじやねえか。もう少し、この――

小六 なあに、こいで、もともとだ。なるほど、六年が間、あいつが待つていようなどと思つたのが、虫が良過ぎたんだ。小僧、やつぱり、焼きが廻つていやがら。

文三 だつてお前、それとこれとは、別だ。俺の言うなあ、お前――

（言つてゐる所へ、正面廊下奥から、後ろに氣を残しながら、オロオロと昂奮した絹子が金貝看護婦に助けられて連れられて来る）

絹子 いえ、かまいませんから――大丈夫です！ かまいませんから――

金貝 此方で――いつとき休んでいて下さい。――また、あなたが、なんですと困りますから――

絹子、あたしは、たとえ、どうなつても、かまいませんから――あたしの血を採つて下さい。私  
の――

金貝 （無理に絹子を長椅子に坐らせる）大丈夫ですから、安心して――妹さんが附いていらつしやるんですから――

絹子 駄目でしょうか？ 私のでは、駄目でしょうか？

金貝 身體が弱つていらつしやるんですから。――いえ、そうなれば、チャンと先生がなさつて下さるんですから、安心して、委せて――

文三 ……（あがり端のところから振返つて二人を見ていたが）どんな具合ですかね？

金貝 は？ ……はあ。

小六 ……（これも振返つて、オロオロと廊下奥にばかり氣を取られている絹子の様子を見ている） ……いけないかね？

金貝 いえ……いけないつて事はありませんけど……なにしろ……一聲でも、泣いてくれるようだと、取りとめると、先生、おつしやつていますけど——

絹子 （祈るように） ……泣いてくれ！ 辰夫、大きな聲で泣いておくれ！ 辰坊、泣いておくれ！ （そこへ廊下奥から婦長が小さいガラス板とメスを持って出て来る）

婦長 （その邊を見廻し、あがり端に行つてゐる小六と文三の方へ敏捷に寄つて行き） あなた方、チョット待つて！ チョット、チョット！ あがつて下さいな！

文三 なんか、その——？

婦長 すみませんけど（文三の片耳を、いきなり掴んでグイグイと消毒する） ジツとして！（メスを持つて行く）

文三 おつと！（めんくらつて、眼をパチクリさせている）

婦長 はい、よろしい。（採血を済ませて、疵跡にバンソウコウをはり） そちら——（今度は小六の耳にかかる。手馴れたもので、早い）

小六 ……どうするんですか？

絹子 辰夫、泣いておくれ！

文三 ……どうするんかね、俺達を？

婦長 はい済みました。チョットの間、待つていて下さいね、直ぐですから。

絹子　いかがでしょう？　もう——？

婦長　あなたは、そこで横にでもなつていて下さい。（小走りに廊下奥へ）

文三　なんせ、たまげ返つたバアちゃんだなあ……どうも……（金貝に）ありや、偉いのかねえ、此處で？

金貝　（微笑）　はあ、婦長さんです。

絹子　それで、どうなんでしょう？（これはあくまで子供の事が気がかりで、金貝にすがり付くように聞く）

金貝　先生と婦長さんがいらつしやるんですから、そんなに心配なさらくつても——

小六　（妙な風になつてしまつて直ぐには帰りもならず、絹子の方ばかり見ていたが）……それで、何かね、……その御厨という人の留守は、暮しの方はどんな風に——？　親戚は無いのかね？

絹子　……東京には親類は無いんです。……辰造は工場の方へつとめていました。それで、そのあと、頼んで、同じ工場へ私もつとめさして貰つています、精密機械の……。妹も働きに出ていますから……。

小六　すると、子供は——？

絹子　辰夫は託児所にあずけて行くんです。……それで、そんなわけで、今度も、つい手遅れになつてしまつて……。夕方から、痛い、痛い……いえ、しばらく前から、おなかの具合が悪くつて、直ぐに痛いと言つてました……それで、いつもの事で大して氣にもしないで、そのままにして置いたんです。腸捻轉なんて、思つても見ないものですから……そのうち、あんまり苦しがる

ので、こちらへ、なに……。子供の事で何を聞いてもよくわかりませんが、晝間、すべり台から轉げ落ちて、棒かなんかでひどくおなかを打つたらしいんです。前から故障が有つたところへなにしたんで、そいで——だそうなんです。……いえ、私の不注意です。こんな事になつてしまつて……みんな、あたしが至らないからです。……こいで、あれに死なれでもすれば……御厨には申しわけがないし、あたし、生きちや居れません。（泣く）……辰夫、どうぞ、お願いだから、お願いだから、泣いておくれ！

文三 大丈夫だよ、大丈夫、そんな事にやらんよ、なあに、そんなお前——

小六 ……（絹子の様子の痛々しさに、なぐさめの音葉も出ないで見ていたが、フト思い付いて洋服の内ポケットから紙幣入れを掛り出し、文三に渡す）

文三 ……どうすんだよ？

小六 ……（眼顔で絹子を差す）

文三 そつくり——？（小六うなづく。文三、絹子の方へ行き、その膝へ紙幣入れを置く）

絹子 ……（それを見てから、小六の方へ眼をやる）

小六 ……少しだけど、何かのたしに、使つてくれ。

絹子 いえ、そんな……私、こんなもの！

小六 ホンの土産代りだ。……なあに、たんとはねえ。（微笑）なに、こんな事と知つてりやもう少しは持つて來れたんだが、なんしろ、まるでお前……ハハハ（寂しい笑い聲）

絹子 ……すみません。（金の事ではない）

小六 いいんだ、いいんだ、ハハ、なに、もともと——

(そこへ再び婦長が急いで出てくる。腕まくりをしてある腕を更にまくり上げながら)

婦長 さ！ ええと……(と文三と小六を見て) 血を少しばかりいただきませすよ。

文三 血？ 血と言うと、その——？

婦長 なに、ホンの少しです。

文三 血をかね？ (恐慌をきたしている) おいらあ、どうも、この——

婦長 いや、あんたはペケ。合いません。(小六に) こちらの——

文三 ペケえ？ 眼をキョトキョトさせながらも、ホツとする)

婦長 (かまわず小六に) あがつて下さい。

小六 おいらの？

婦長 あなたのは、合いますから。いいでしょう、ホンのチョットですから？

小六 そりやまあ、構わねえけど——

婦長 (小六の手を取つて引き上げるようにして) ひとつ、頼みます。さ——

絹子 それでは、あの——？

婦長 いいでしょ？ 輸血協會では間に合わないし、此處の看護婦に一人、合うのが居ますけど、看護婦ですしね、チョット困りますから。それから町會から型の合う人に來て貰つてもいいんですけど、なにしろ遅そござんすしね、丁度この方なら御懇意のようだし、あなたからも、頼んで下さい。

絹子 はい、そりや……でも——(しかし、今の場合、具合が悪くて、口に出して頼みもならず、困つて、ただ祈るような眼つきで小六を見てオロオロしている)

小六 どうも、困つたなあ。

婦長 それで、こちらの息子さんの命が助かるかも知れないんですから——

小六 助かるかね？

婦長 そりや、やつて見なければ、なんともわかりませんが……とにかく、今のままに置いて置けば、もう望みはありません。

金貝 お願いします！

小六 弱つたなあ、どうも。

婦長 あなたの心持一つで、——ことに、まだ復員なすつて来ないと言うじやありませんか、あの子のお父さん——そう言つた方の息子さんの命が助かるかも知れないんですから——

小六 ……そりや、なあに……アカの他人にしたつて、人一人助かるとありや、俺の血なんぞ、いくらでも、やつていいんですがね——

婦長 よろしい！ では、急いで！ なに、このままでいいんです。上着だけ此處で脱いで行つて貰いましょうか。（言いながら、既に小六の背廣を脱がせにかかりている）

小六 （あわを喰つて）チヨ、チヨット。チヨット待つて！ そうじやねえんだ、そうじやねえんだ、俺の言うなあ、その……（言つている中に、婦長から上着を脱がされてしまつてゐる。益々あわてて）とつ！ いや、俺の言うなあ、その、俺の身體あ、どうも、役に立つめえと思つて持ちくずして……この、ロクな事あして来てねえんだから、さんざん、この……つまり、よこれ切つてるんだから——

婦長 さあさ、急いで！ 此方へ来て下さい。

小六 弱つたなあ！ そうじやねえんだ。俺の身體じや、そんなわけには行くめえと思うんですよ。

婦長 どつか、悪いんですか？

小六 なに、悪いつてわけじやねえんだけど、全段、俺の身體や血なんてえものは……どうも困るんだ。……だろうと思うんですよ。

婦長 どれどれ、じや、チョット見せなさい。（今度はシャツをむしり取りはじめる）ズボンも脱いで！

小六 あ！……（既に上半身を半裸體にされかけて、あわて切つて）そうじやねえんだ、そうじやねえんですよ！ 困るよ！ 困りますよ——おいノロ文！（うろたえて、文三に助けを乞う）  
文三 どうもこの！ ええと……んだけんど……（これもウロウロするが手出しもならず）

婦長 いい身體してるじやないの！

小六 違うんだ！ その俺の身體なんて、これまで、その、持くずして……この、ロクな事あして来てねえんだから——

婦長 ……（相手の言うことがわかつたようなわからないような、しかしさすがに年で、少しは察しが附いたらしく、ニコニコして）かまんかまん！ そんな事あんた、なあに、誰にしたつて——いざとなりや、どうにでもなりますよ。

小六 （へこたれ切つて殆んど泣きつつら）いや、それが、普通の誰も彼ものなにとは少しワケが違うんだから、どうも……困るよう！

婦長 かまいません！ さ！（強引に小六の手を掴んで、廊下奥へ引立てて行く）まかせて置



きなさい！ 此方はくろうとです！

小六 知らねえよ！ 俺あ、知らねえよ。（消える）

（あとには文三が、小六の言う事に就いては彼自身にも多少はおぼえの有る事ゆえ、よくわかるし、さればと言つて押しとどめる事もならず、閉口して、額に片手を持つて行つたまま、アツケに取られて見送つている。絹子はそつちへ頭を垂れて、兩手を握りしめてゐる。金貝は小六のあわてようが、あまりひどいので、びつくりして見送つている）

絹子 ……（低い聲で）おたのみします、小六さん！

文三 ……どうも、へえ、……フウ！ 全體、この……（ボンヤリと金貝に）なんですかねえ……この輸血なんて事が、そんなに手輕に出来るもんですかねえ？

金貝 はあ、簡単です。準備はスツカリ出来ていますし、一番簡単なやり方だと十分もかかりません。内の先生は、それに、軍醫で出征なすつていたので、さんざ馴れていらつしやいますから。文三 そうかなあ……軍醫さんか……ええと（と奥を氣にしながら、絹子に）お絹さん……その、御亭主というなあ、いつ頃出征なすつたんです？

絹子 ……（心配で椅子から立つて見たり、又掛けて見たりして奥の氣配に氣をとられている）え？

文三 いや、その御厨という人は、いつ頃出征——？

絹子 ……さきおとどしです。……子煩悩な人で……辰夫が死にでもすると……どんな氣持がするか……それを思うと、私、たまらないんです。……出来ることなら、私が身替りになつてでも、辰夫だけは……辰夫だけは私……。

文三 そうだろうなあ……（金貝に）輸血というもなあ、そんなに利き目が有るもんですかねえ？

金貝 そりや、やつて見なくては判りませんけど……病氣の種類にも依りますが……出血のひどい患者さんなど、大概テキメンに利きます。人に依つては、今迄脈も息も絶えていたのが、血を入れると、いきなり眼をパチパチさせて、起きあがろうとする人なんぞありますわ。なにしろ、生きている血がジカに入つて行くんですから。

文三 そんなもんかねえ……。

絹子 すると辰夫などのような病人には——？

金貝 利くわけですわ、わけから言えば。……とにかく、泣き出す位の力が出て呉れさえすれば、こつちのもんだつて先生おつしやつていました。

絹子 ……泣いてくれ辰夫！ 大きな聲で泣いておくれ！（ヨロヨロ立つて廊下口の方へ行きかける）

金貝 落着いていて下さい。（それを無理に椅子へかけさせる）そんなにして、又、あなたが倒れたりなさると、困りますから。

文三 そうだ、そりや、落着いていなくちやいけねえ……（自分も落着けないうで、ウロウロと廊下口へ行つて奥を覗いたり、椅子の方へ來たり）大事にしてくれねえと……だけど、いやにヒツソリしてやがるなあ。……いや、なんだよ、實際この、びつくりしましたよ、最初にあんたを見た時あ……なんしろ、あんまり變つているんでなあ。……そりや、こんな心痛が有つて見りや、無理もねえ。無理もねえけれど、なんせ、昔の面影なんぞ、どこを捜したつてねえもんなあ。ド

ツキリしちやつたあ。……はじめ、先刻の妹さんを、あんだだとスツカリ思い違えてね、ハハハ、また、似たと言つても、六七年前のあんに瓜二つだもん。ハハハハ（つとめて笑う）……そんなでも、兄きは、やつぱり、たいしたもんじやありませんか、當のあんたを見たら、こんだけ變つてゐるのに、一目でそれとわかつたからね。惚れてるといふなあ、たいしたもんだなあ。ハハ……（やつぱり、他の二人は、笑いに乘つて行こうとせぬ）

婦長の聲（廊下奥から）金貝さん！ 金貝さん！ チョット来て！

金貝 はい！（立つて行きかける）

絹子 ……（これもギクリとして立ち、金貝の後に添つて行きかける）あの——？

金貝 あなたは此處に居て下さい。

絹子 でも、私も——

金貝（絹子の肩を押して椅子に掛けさせ）大丈夫ですから、此處に落着いて居て下さい！

（文三へ）あの、こちら、お頼みしますから。

文三 え？ ああ、なに、よござんす。ええと——（言つている間に金貝は小走りに廊下奥へ）

どうも、この……（まだ立つたり掛けたりしている絹子）大丈夫だよお絹さん……まあ、そんなに、なんだ……なに、向うはチャント大勢附いているんだから……（言いながら絹子を掛けさせるが、しかし、そう言つている自分も、奥の氣配にばかり氣を取られている。奥はシーンと靜まり返つていて、コトリとの音もしない）……いやあ、ハハハハ（と無理をして笑つて）おどろいたの、なんのつて！ なんしろ、ねえ、四五日前、いきなり稻葉の兄きにふんづかまつて、お絹はどこだ？ まるで、この俺があんたの親元じやあるめえし、あんなの居どころを知らねえとい

う法はねえと言わんばかりさ……マゴマゴするてえと、ぶんなぐりそうなけんまくでよ、その場から一緒に行けつてんで……まるで、うしろからケツを叩かれんばかりにして、毎日々々、足あスリコギにして、あんたの行方さがしさあ。ハハ、それで、探ね探ねてヤットあんたの家が見つかったら留守……此處だと言うんで来て見ると、これだ。……なにさ、はなつから看護婦になつているんだと思つているもんだからね、先刻の山あらしみてえな看護婦の大將にやおどかさされる……や、もうサンザンさ。……そんでまあ、とにかく、飛込んで見たら、その當のあんたのさ、子供さんの手術の眞最中だと來た……まるでどうも、芝居か小説本……なら、まだいいけど、手もなくモグラモチが、彼方へ行つちや石ころにアイタシコ、此方を掘つちや木の根へアイタシコ、しまいにヤットの事で、うまい具合の穴を掘り當てたと思つたら、そいつが待ちかまえていた犬の口ん中だつたつてね……先ず、まあ……これがめんくらわずに居られますかつてんだ……なんしろ、お前さん、おどろき桃の木さんしよの木、……さんしよの木の下で、雨ふり蛙かえるが眼をむいてらあ……そんでまあ……（相手の氣をまぎらすために喋るが、心が此處にないために、次第にとりとめがなくなつて來る。それに絹子はやはりヒヨイと立とうとしたり、椅子の背を掴んで見たりして奥にばかり氣を奪われて彼の言うことなどよくも聞いていないので、段々に言葉が続かなくなつて來る）この……（ヒヨコヒヨコと廊下口の角まで行つて、奥を覗く。絹子は無理に落着こうとつとめながら、その文三の横顔をジツと注視する——あたりはシーンと靜かである）

（出しぬけに、大時計がジージーと唸つてから、ゴーンと一時を打つ。その音が深夜の靜かな醫院内に、大きく反響する。……虚を突かれて、文三も絹子もギクンと飛びあがる）

文三 ……（驅け出しそうにしたへッピリ腰で振返つて）な、な、な……へつ！

絹子 ……（これも直ぐに時計とわかるが、心配は益々つのるばかりなので、立つたままでワクワクしている）

文三 （絹子を見て）ハッハハ、おどかすねえ！ チツ！ ねえ、ハハ。

絹子 ノロ文さん、どうか、どんな様子か、手術室の方を見て来て下さい。

文三 ノロ——？

絹子 いえ、あの……お願いですから。

文三 フウ！ そりやね……なんだ……ノロ文か。（變なところで感心している）

絹子 （相手の氣持などに氣を使う余裕なし）見て来て下さい、どうか！

文三 うむ……。

（そこへシャツの腕まくりをおろしながら小六がフラーツと戻つて来る）

文三 お、どうした、兄き？ ……すんだのかね、もう？

小六 ……。（氣抜けがしたように絹子の方を見る。絹子は、すがり附くような眼で小六を見たり、廊下奥を見たりしている）

文三 そんなで、どんなふうかね？ その——

小六 うむ……（少しヨタヨタするような氣味でユツクリ歩いて椅子に置いた上着の方へ）

絹子 小六さん、あの——

（そこへ奥から、昂奮した婦長がツカツカ出て来る）

婦長 御苦勞さんでした！ チョットその邊で、横になつて休んで下さい。

小六 ……………。

婦長 そのこの長椅子にでも。

絹子 それで、どんな具合なんでしょうか？

婦長 もう少し見て見なければ、わかりません（小六の方へ寄つて行き）いいんですか？ 二十分ばかり、此處で横になつて休んで下さい。さあさ！（小六に上着を着せてやる。絹子もそれに手傳う）

小六 いいんだ。……なに、なんともねえ。……だけど……おいらあ、知らねえよ。……あの子にたたつても、おいらあ、知らねえよ。

絹子 ……すみませんでした。

婦長 はい、ネクタイ。

小六 いいんだ。（いたわられるのが少し癩に障るか、怒つたように言う。絹子は婦長からネクタイを受取つて、小六の襟に結んでやりかけるが、両手がブルブル顫えているために、なかなか結べぬ）

婦長 ハハ……これでもし効果が有れば、あなたはあの子供さんの命の親ですよ。

文三 大丈夫かい兄き、少し横になつていなくつても？

小六 なんともねえと言つてるじゃねえか？

文三 だけんど、少し、この、フラフラしてるんじやねえか？

婦長 よろしい、取つて置ききの葡萄酒が少しあるから――

小六 チツ、大丈夫ですよ。

(その時、はじめ静かに、次第に激しく、奥からきこえて凍る子供の泣聲。同時に一同ピタリと黙つてしまい、その方へ耳をすます……間。……婦長は藥局の方へ行こうとした足を止め、絹子は結びかけたネクタイの手を停めたまま)

婦長 ……(次第に自分に集つて來た他の三人の視線を見廻して、強くうなずいて見せる) うまく行つたようです。……(藥局へ入つて行く)

絹子 ……(子供の泣聲を聞きすまして奥の方を見ていた眼を、次第に小六の眼へ移す。まだ無意識に小六のネクタイを掴んだままである)

文三 ……やれやれ……。

(そこへ、パタパタと奥から驅け出して來る友代)

友代 ……姉さん! 姉さん! 辰夫ちゃん——姉さん! 辰夫ちゃん眼を開いて、姉さんを捜しているわよ!

絹子 ……(ネクタイを掴んだままの両手で顔を蔽う。自然、小六の胸に前髪が触れんばかりになり合掌しているような姿勢になる。……やがて立つているのに堪え切れなくなり、そのまま、ズルズルと膝を突いて、小六の足元に手をつく) ……ありがとう! 小六さん、ありがとうございます! おかげで——(なりふりも構わない心底からの感謝)

小六 ……(ボンヤリして突立つている)

(そこへ、青色満面の院長がツカツカ出て來る。それと出會いがしらに、葡萄酒のビンとコップを持った婦長が藥局から出て來る)

院長 本田君、よさそうだ。タバコくれ。

婦長 はい。（手がふさがっているの、コップを手近かに立っている文三に）はい、これを。

文三 へえ？（そのコップに婦長が葡萄酒を注ぐ。注ぎ終ると婦長はビンを友代に渡して、自分分はタバコを出して院長に渡し、マッチをする）

絹子 （院長に）ありがとうございます。ありがとうございます。

院長 （フーツとタバコを一吸いして）いやあまだハッキリした事は言えんが、大概大丈夫でしょう。早く行つて見てやつて下さい。

絹子 はい。……（イソイソして、小走りに廊下奥へ去る）

婦長 あらまあ！ どうしたの、あんた？

文三 へ？

婦長 あんたにあげたんじやないのよ、その葡萄酒！（なるほど、文三は、うつかり飲んでしまつている）

文三 さいですか？

婦長 さいですかじやないですよ！ あたりまえじやありませんか！ こちらのかた方が、採血した後だから、なにしているのに、なんてまあ、ホントに！（コップをむしり取つて小六に手渡す。それに友代が葡萄酒を注ぐ）

院長 ハハハ、まあ、いいさ。ハハ！

友代 ホントに、ありがとうございます。

院長 なに、禮を言うなら、この方さ。（小六を差す）

友代 （小六に）何と言つてよいか――



小六 ……（まだボンヤリしていたが、手のコップにフツと氣附いて、一氣にグーツと呑みほし、頭をブルンブルンと振る）

婦長 ホントに、いつとき横になつているといいんですけどね？

小六 なに……だけど……（院長に）どうも、なんですよ、おいらあ、知りませんよ。

院長 なんだね？

小六 おいらの身體なんてもなあ、これまで持ちくずし切つて、……とにかく、俺の血なんて、ヤクザと言つても、これほどヤクザな――

院長 やあ、君の血、良い血です。

小六 え？

院長 強い、立流な血だ。

小六 ……強い？ ……つ――？ （ビツクリして院長の顔を穴のあく程見つめている）

院長 大丈夫だよ。ハハハ。（きげん良く笑いながら、小六の背を軍手でトンと一つ叩いて）さてと（婦長に吸い残りのタバコを渡しながら）じや、あと、葡萄糖を一本、用意しといてくれ。

その必要はなかりうとも思うが。（奥へ歩き出しながら）急ぎはしない。（廊下奥へ消える）

婦長 はい。……（友代に）あなた、もつと注いであげて。

友代 はあ。……（小六に葡萄酒を注ぐ。小六は、それを無意識に立てつづけに二三杯飲む。眼はうつろに院長の去つた方を見ている）

婦長 （小六の様子が少し變なので注意して見ながら）ホントに、あなたが折よく來て下すつて居たので、助かりました。

小六 ……………。

文三 兄き——おい！

小六 う？ ……（眼がきめたようにその邊を見廻し、もう一度奥へ眼をやり、それからユツクリと） ……そいちや——（婦長にチョット頭を下げてコップを返してから、あがり端へ行き、腰をおろして、靴をはきはじめる。文三も、その小六の様子を横眼で見い見いしながら、靴をはく）  
友代 ……（二人が帰る様子に、氣をもんで）あの、もうチョット居て下さると、なんですけど ……姉からも、よくお禮を言つたり ……それから、あの、なんか——

婦長 大丈夫ですか。

小六 ……（靴をはいていた手をフツと停め、タタキを見つめて、ジツとなつてしまふ。不意にククと妙な聲を出す。文三も婦長も友代も、びつくりして見守る。その視線の中で、クク、ウーッと二つ三つ男泣きに泣き出す。しかし直ぐに泣聲を止め、両手で顔を蔽うて石の様にうづくまつてしまふ。 ……他の三人も、無音でそれを見守っている。 ……永い間。 ……大時計の秒刻の音）  
文三 ……（驚きからヤット回復して）ど、どうしたんだよ、兄き？

小六 ……（ツト立つて、出て行きそうにするが、振返つて友代を見て、フツと眼を釘付けにされる）

婦長 氣分でも悪いんじやありませんか？

小六 ……お絹 ……お絹さんに、よろしく言つて下さい。子供さんも ……そいから自分も、どうか大事にしてくれるように。

友代 はあ、それは ……でも、ホントに、もういつとき居て下さるといいんですけど——姉さん

も、いろいろ、なにか――

小六 いいんだ――（先程からあまりマジマジと相手を見るので、友代モジモジする）

文三 ……なんしろ、いまだに、お絹さんだと言われてウツカリすると、そう思えるよ、うむ。

友代 まあ……。

小六 そいじや――（先きに立つて出て行きかける）

文三 どうすんだよ、兄き？ どこへ、お前――？

小六 こいから、上野だ。

文三 上野？ そいじや、なにかね、やつぱり磐城に行くんだね？

小六 ……（うなずいて）お前も一緒に來たきや、來い。

安三 そりや！ まあ、行くけどさ、……しかし、急にいろいろになるもんだから、なんだか、

お前――

小六 今夜という今夜は、考えた。……今迄、全體俺あ、何を寢呆けていたのかと思う。……六年も七年も経つた夢を追っかけて、なんてえこつた！ ……第一キザつたらねえ！ 以前ヤクザな眞似ばかりしていた頃あ、太えツラしていたくせに、今になつて見りや、自分で自分に見きりをつけて、物の役にや立たねえもんだと思ひ込んで！ ケツ！ ウヌの身體ん中にや、ドブ泥でも流れていると考えていたんだなあ。……そいつが、なんと……強い血だ。強い血……びつくりだ。ウム。これまで、まるでお前、のら犬のように……たよりになるものあねえかと、捜し廻つてさ、行く先々、次から次ぎと叩きこわされてちや、ウロウロする。……言われて、氣が付いて見るてえと、なあんのこつた！ ウヌが身體ん中に、なんとお前！ チヤント有るんだ。は

じめつから備わつてら！ いただいでら！ チツ、どうでえ、ビツクリだあ！ ……これまで見てえに、ウヌが身體を…：ウヌが量見を…：ウヌで粗末にしちや、ならねえ！ 立てれば、チャンと人さまの、役に立つ身體だ。…：へつ！ 女と一緒に向うで小じんまりと暮そうなどと考えて、シヤラツクせえ！ 正に小僧だつたよ。…：しかし、こうなつたら、大僧も小僧もねえや。もうグラグラと迷つたりはしねえ。石炭が要するというから掘りに行くんだ。

文三 そりや、そうだ！ そりや、そうだ！

婦長 どうなすつたんです？

小六 ハハハ、なにね、これから炭坑に行くんです。

婦長 そう！ そりや、結構ですわね！ そりや、いいわ！ ひとつしつかりやつて下さいよ！

小六 あとは、よろしく一つ――

婦長 大丈夫々々々。(友代に) そいぢや、あなた、もう一つ注いで、祝盃に。はい。(と差出したコップを手近かな文三が受取る。それに友代が葡萄酒を注ぐ) だけど、まだ電車が無いでしように？

小六 歩いて行きます。

婦長 歩いて？ 大丈夫ですか？

小六 ハハ、なに、わけあねえ。

婦長 あらま！ またつ！ (叫ぶ。再び葡萄酒は文三が飲んでしまつている) なんてまあ、この――！ (えんびを伸ばして文三のえりくびを掴みにかかる)

文三 ひつ！ (掴まれては大變と、コップを友代に渡すや、あわてて懸命に飛びさがつて、三

四回、タタキの所でキリキリ舞いをしたあげくに、回轉扉を突き開けて表へ消える)

小六 アツハハハ！ (友代から渡されるコップを持つ。友代、涙を流した敵のまま葡萄酒をつぐ) 友代ちゃんだつけ……姉さんに、そ言つて下さい。小六はよろこんで出かけたつて。

友代 ……はい。

小六 ……(グツと一息に飲みほして) ……ありがとう……(コップを友代に返す)

安三 ……(回轉扉を細目に開けてニユツと首だけ出す) ……どうしたんだあ、兄き？

婦長 まあた、呑みに來た！ (腕を振廻す)

文三 フツ！ (びつくりして、二三度頤を扉につかえさせてゴリゴリ言わせて消える)

小六 ハハハ、じや、さよならよ！ (扉を押して表へ)

婦長 フフ、アツハハハ、ハハハ！ (腹をゆすつて笑う)

友代 まあ！ ……(コップと葡萄酒のビンをかかえ、頬に流れた涙をそのままに、扉のガラス越しに、去り行く二人の姿を、すかして見ながら、これも笑えて來る)

(幕)

あとがき

庶民の一人として全く自然に、片腕を張らないで庶民の場にドツカリと坐りこんで泣いたり笑ったりしたいという強い本能が私にある。フランス語でポピュリズムといったようなもの。それが時々私にこのような作品を書かせる。作品の基調になつているセンスが平俗なことは自分で百も承知しているのである。それでいて自作の中にこのような一連のものを私自身は割に好いている。だから今後も多分、時々はこの手の作品も書くのだろうと思う。

この作品は、敗戦二年ぐらいの、世情荒れすさんで人の心もおおかたはダダ黒くトゲトゲしい中で、そのような気分から刺戟されればされるだけ、それとは反対な色合いを持つたささやかな贈物を持ち出してみたい氣持から書いた。

一九五二年九月末

三好十郎

底本.. 「三好十郎作品集 第三卷」河出書房

1952 (昭和27)年10月25日初版發行

初出.. 「風刺文學」

1947 (昭和22)年9月号

※1949 (昭和24)年8月 世界評論社から單行本「胎内」に収めて刊行。

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23)年5月25日